

日本航空株式会社所属
ボーイング式747-200B型JA8122
に関する航空事故報告書

昭和54年10月18日

航空事故調査委員会議決（空委第57号）

委員	長	岡田	實
委員	員	山口	真弘
委員	員	諏訪	勝義
委員	員	上山	忠夫
委員	員	八田	桂三

1 航空事故調査の経過

1.1 航空事故の概要

日本航空株式会社所属ボーイング式747-200B型JA8122は、昭和54年7月22日、同社の定期001便としてサンフランシスコ国際空港を離陸し新東京国際空港に向け飛行中、旅客1名（男性49才）が病死した。

1.2 航空事故調査の概要

昭和54年7月24日 事実調査

1.3 原因関係者からの意見聴取

昭和54年10月16日 意見聴取

260001

2 認定した事実

J A 8 1 2 2 は、昭和 5 4 年 7 月 2 2 日、旅客 2 6 0 名、乗組員 2 7 名（運航乗務員 6 名、客室乗務員 2 1 名）がとう乗し、0 8 時 1 0 分（日本標準時。以下同じ。）サンフランシスコ国際空港を離陸し、巡航高度 3 1,0 0 0 フィートで新東京国際空港に向け飛行中、0 9 時 1 0 分ごろ、旅客の 1 名の容態が急変した。

客室乗務員は、機長に報告すると共に、酸素吸入を始め、とう乗中の日本人医師 2 名に手当を依頼したが、0 9 時 2 5 分、サンフランシスコ西方約 5 7 0 海里の公海上空で死亡し、当該医師により確認された。

同旅客は、インドネシア国籍の 4 9 才の男性で、がん手術のため、ジャカルタからサンフランシスコに行き、1 0 日間の滞在のみで手術は行われず、ジャカルタに帰国するため、ストレッチャ（担架）輸送旅客として、付添人 3 名とともにとう乗していた。

機長は、付添人の希望及び機内における遺体保存措置の限界等から、目的地をホノルル国際空港に変更し、同空港到着前に燃料 5 0,0 0 0 ポンドを放出した後、1 3 時 1 2 分着陸した。同空港において、遺体とともに付添人 3 名は降機した。

検視官の米国人医師によれば、同旅客の死亡原因は、「がん症」であった。

3 結 論

原 因

本事故は、航空機にとう乗中の旅客が、「がん症」により死亡したことによるものと認められる。

260002